

「愛野町内地名の起源」

長崎ウエスレヤン短期大学 吉 富 一

地名は愛野の先祖が、我々に残してくれた貴重な文化遺産である。我々の生まれた土地や、住んでいる土地の名は、一体どうしてこのように名づけられたのであろうか。

日本には地名学という新しい研究がおこり、全国的な日本地名学という新しい研究がおこっている。全国的な日本地名の解明にあたり、地名の発生、伝播、発達、分布などに科学的なスポットを与え、その中に法則を見い出し、体系的な学問にしようとしている。

日本の文化が複雑多岐で、かぎりない美しさと意味をもつように、地名も又、多種多様でつぎを知らぬ滋味と価値をそなえている。しかし近時地名は単なる符号、土地を区別するために設けられたものであるという見方をなすものがあり、無趣味で卑劣な新町名が生まれてくる一方、古来の香高い地名が失われていく。我々は郷土の心ある人と協力して、保持発展させていかなければならない。先賢の次のような言を味わってみる必要がある。

「地名は地理的事実の広い意味での芸術的に圧縮されたものである」。

「地名は過去の文化発達の跡を、よく伝えている貴重な記録である」。

「地名こそは立派な神代文字である」。

「地理学の方法をもってすれば、地名の研究は可能である」。

「由緒ある地名を平気で取かえて、悦に入っている人は錦紗の着物を化繊に取かえて得意がっているようなものだ」。

宮崎 康平

○地名研究上の注意

イ. 漢字を以て「あて字」したものが多[◎]い。音を以て調査する必要がある。

例——桜井

サク（谷合の小平地） イ（川）で、谷間の小平地を流れる川のことである。桜と関係がない。故に愛津の桜山は谷合の小平地を有する山のことであろう。

ロ. 1つの地名だけで結論を出さず、いくつかの同類の地名を集めて比較し、又分布図をつくり、現地の地形を調査すること。

例——木場・鬼塚・坪・園田・狩場

このような地名は全国的にも多く、島原半島にも多いから、分布図をつくり、又現地の地形・歴史を調査して結論を下したがよい。

ハ. 地名の分類は大略次のような分類がよい。

。自然的地名

地形・地質・水・気候（日射・風等）・地すべり・動植物

。人文的地名

歴史的地名・宗教・交通・農業・漁業・牧畜・水産・狩猟・城・人名のつく地名・境界地名

◎愛野町小字名

野井名(93)

池無田 <small>ノウチ</small>	舟津町 <small>ジュンテ</small>	栗山 <small>サコ</small>	葉山頭 <small>ガシラ</small>
野内	北順手	迫	園田 <small>ソン</small>
城山	南順手	中尾 <small>キョウデ</small>	宮ノ本
新崎	下ノ名 <small>シモミョウ</small>	京手	植木高野 <small>ゴウヤ</small>
城	惣戸平 <small>ソウトヒラ</small>	葉山	久保
土井田	岩畑	中尾辻 <small>ノイバル</small>	宮崎
新高野 <small>サシイデ</small>	島脇	野井原	野井山頭
差出	堤 <small>シンガイ</small>	上ノ原 <small>ソウバル</small>	植松
木場高野 <small>ハル</small>	新貝	相原 <small>カヤガエ</small>	西頭
原	竹崎 <small>コバヒラ</small>	萱構 <small>カミシゲヲ</small>	野井山谷
五郎丸	木場平 <small>トラツグ</small>	上重尾	野井山尻 <small>マルヤマ</small>
山崎	虎継	西野平 <small>コヤマ</small>	丸山 <small>カサセ</small>
鬼塚	下野平	小山	笠瀬
大坪 <small>ニシヒラ</small>	中野平	重尾 <small>サシイデヒラ</small>	山ノ口
西平 <small>クスノキマチ</small>	東野平	差出平	宮崎平
楠町 <small>オオゴウヤ</small>	上野平 <small>シオ</small>	桐木	獺ノ口 <small>ウン</small>
大高野	汐塚 <small>ケショウデ</small>	龍宮下 <small>ミヤゾエ</small>	新崎新開 <small>オオカワスジ</small>
下獺ノ口 <small>ホン</small>	化粧手	宮添	大川筋
本ノ平 <small>ヒラ</small>	汐塚下 <small>タゼン</small>	曲り	城の前
今木場 <small>ムカイ</small>	田善	千島川尻	有明新田
向ノ尾	井川尻	龍宮脇 <small>フルシンデンモリシタ</small>	下大江
狩場	宮ノ下	古新田守下	
前田	北ノ下	古新田	
棒ヶ崎	北川下	龍宮上	

愛津名(118)

山王 <small>サンヲウ</small>	矢櫃	五反間 <small>ゴタンマ</small>	城ノ尾
三瀬ノ内 <small>ミセ</small>	上矢櫃	浜口原	丸ノ内
布津田 <small>フツ</small>	小無田高野	浜口高野	牧尾平 <small>マキノオヒラ</small>
佐用ノ元 <small>サヨウノモト</small>	上小牟田	善太 <small>ゼンタ</small>	木場 <small>ハナグリイシ</small>
関 <small>クタンツボ</small>	小牟田	入龍 <small>イリュウ</small>	鼻穿石
九反坪	小無田口	善太下 <small>ヤマシタ</small>	谷頭
中田	前小牟田 <small>ワリイシ</small>	山之田	桜山
城の前	割石尻	山之田尻 <small>ノゾエ</small>	迫 <small>サコ</small>
土居口 <small>ニユウリョウジリ</small>	割石	野添	牧尾 <small>タバタ</small>
入龍尻	割石頭	四面平 <small>ソウハル</small>	田端
寺ノ尾下	八郎下	相原	岩見口
後新田 <small>コムタ</small>	寺尾高野	上相原	中嶋
小無田下	寺尾原	宮ノ前 <small>シリナシヲ</small>	上迫 <small>タテヤマ</small>
境ノ尾下	割石谷	尻無尾	立山

境ノ尾 <small>ウシロ</small>	上寺ノ尾	姨ヶ谷 <small>ウバ ガ ダニ</small>	弘山 <small>ハライ</small>
後小牟田	寺ノ尾	椿高野 <small>ツバキ</small>	岩上
上境ノ尾	上ノ原 <small>ウエ ノ ハル</small>	棒原	中野原
境ノ尾前	浜口	新山 <small>シン ヤマ</small>	首塚 <small>クビヅカ</small>
下矢櫃 <small>シモ ヤ ビツ</small>	沖山	上城ノ尾 <small>カミジョウ ノ ヌ</small>	松木原
桑木原 <small>ハツ タン バタケ</small>	馬下路	東免場 <small>ヒガシ 沼エ</small>	善太頭
八反畑	竹火	東構	下構
天神平 <small>ヒラ</small>	上竹火	北構	鬼塚
上清水川	伴七下路 <small>バン シチ オリ ジ</small>	免場下	八郎松
山河 <small>ゴウ</small>	下白塚	桃山	八郎脇
火箱 <small>ヒ バコ</small>	白塚	植松	展望台
谷	上白塚	新高野	上大江
中野	割下 <small>ワリ シタ</small>	寝櫓 <small>ネ ハゼ</small>	宮ノ下
沢	品垂 <small>シナ ダレ</small>	原高野	四面下
下前原 <small>カキ ジリ</small>	免場 <small>メン</small>	六左エ谷 <small>ロク サ エ ダニ</small>	前原
垣尻			

◎愛野町地名の分類

1. 地形と地名

野・原・平・尾・迫・久保・谷・頭・尻・竹火・口・竹崎・立山・丸山・栗山・小山・首塚

2. 旧海岸線と地名

大江川・棒崎・新崎・小無田・中島・浜口・新地・新田・土居口・愛津・船津・蓮沼・布津田・汐塚・笠瀬・棚島

3. 水と地名

野井・愛津・上清水川・入龍・土龍坂・井川尻・沢

4. 農業と地名

木場・化粧手（田）・京手（田）・順手（田）・八反畑・五反間・新田・開拓者人名（六左エ谷等）

5. 狩猟と地名

狩場・尻無尾・山口

6. 交通と地名

三軒茶屋・曲り坂・辻・佐用の元

7. 宗教と地名

寺尾・宮の前・宮ノ本・宮添・宮崎・山王・四面平・天神平

8. 歴史的地名

鬼塚・白塚・汐塚・園田・大坪・五郎丸・土居口・名・構・城・免場・丸ノ内・垣尻・村外・幽霊橋

9. その他の地名

品垂・寝櫓・鼻繰・姨ヶ谷・矢櫃・虎継・玉垣

10. 要 約

1. 地形と地名

その町村の地名には、朝夕見なれた「山」「川」「島」等の地形によって名づけられたものが多い。地名の70%は地形地名であるという。愛野町は雲仙火山の広大な裾野に立地するため、扇状地地形の「野」「原」「平」等の地名が多く、これらの地名は現地の地形と合致する。「平」とは「ゆるやかな傾斜地」ということである。次に書いてみよう。重複する点もある。

野——野井・野内・野平・野井原・大高野・小無田高野・寺尾高野・浜口高野・野添・椿高野・中野原・中野・新高野・原高野・野平・木場高野・植木高野

原——原・野井原・上ノ原・相原・寺尾原・城ノ尾原・中野原・松木原・桑木原・前原

平——西平・木場平・野平・宮崎平・本ノ平・四面平・牧尾平・天神平

次に愛野町の地形は広大な裾野を、多くの小さな河川が浸食して西北にむかって流れている。千鳥川河谷を最大とする八つの河谷と、寺の尾・城の原等の細長い尾根が西北方に並列して走っている。これらの細長い河谷や、細長い尾根の最も地理的条件のよい場所に、最初の元村（親村）が発生した場合、ここを基点として山の方に上・高野・谷頭等の小字をつけて発展していく。又ここを基点として海岸の方にむかって下、口、尻等の地名をつけていく。これらは基点の親村に対して子村（小村）といったらよいだろう。寺ノ尾が最もよい例である。

◦ 寺尾高野←寺尾原←上寺ノ尾 ← **寺ノ尾** 親村（元村）→寺尾下

最も多く分かれたのは小無田である。

◦ 小無田高野←上小牟田← **小牟田** 親村（元村）→後小牟田→前小牟田→小無田口→小無田下

その他の代表的な例を左に書いてみよう。

◦ 浜口高野←浜口原← **浜口**

◦ 善太頭← **善太** →善太下

◦ 上相原← **相原** →相原前

◦ 城ノ尾原←上城ノ尾← **城ノ尾**

◦ 上境ノ尾← **境ノ尾** →境ノ尾前→境ノ尾下

◦ 割石頭←割石谷← **割石** →割石尻

◦ 上矢櫃← **矢櫃** →下矢櫃

◦ 野井原←野井山頭← **野井山谷** ←野井山尻

◦ 上野平←東野平←中野平←下野平

◦ 木場高野← **木場平** →今木場

野

野の語源は「ゆるやか」で「緩やかな傾斜地」ということである。火山の緩やかな裾野とか、緩やかな丘陵地の意味で、雄大な雲仙火山の裾野に位置する愛野町にとっては最も適切な地名である。愛野の裾野を学術的に愛野扇状地というが、カラーの航空写真に見るまでもなく、実に美しいスロープの扇状地である。

原

九州から沖縄まで「原」と書いてハル・バルと読む地名が一面に分布している。鹿児島県の一部では笠の原などのようにハイ・バイと発音する。宮古島の原、種子島や屋久島の晴も同様の地名であろう。

このハル・バリについては古代朝鮮語のハル（原）とまったく同じであるという意見がある。

原とは緩傾斜の低い丘陵の上にある土地で、畑・水田あり古代の大和民族にとっては好適な地理的条件の居住地であった。愛野町の原部落はその好例であろう。

原の地名は全国的にも多く、その地名から起った姓氏も多い。古代の原の造（ハルノミヤツコ）、近代の原マルチノ等がある。原マルチノは有馬の一族で島原原村の住人である。原城などは地形的にみて低い丘陵の上にある好適の居住地である。

中世の西北九州に発生した松浦党も、このような緩傾斜の地形を発生地の地理的条件にしたらしく世知原や福島^{ハル}の原部落などがある。

林野を切り開いて開発した土地を^{ハル}壑・^{ハリ}治と称し、それが原に転化したものである。今治^{イマハリ}・針尾^{ハリヲ}などは字は異なるが原と同じである。

平

火山の裾野のような傾斜地という意味がある。故に地名、人名等の大平は、「大きな広い傾斜地」という意味であろう。このような土地は前項の「原」のように、人間生活の環境によいのか、地名・人名に甚だ多い。

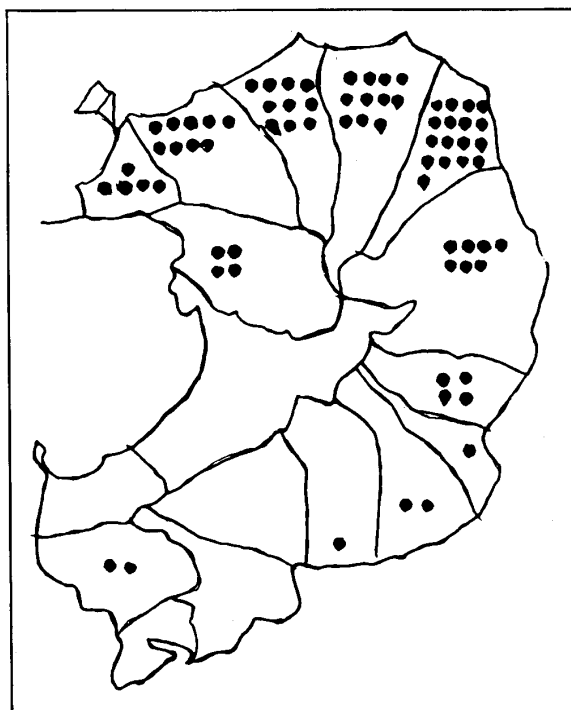
平泉・比良・平内・平田・平山・平沢・平谷・平井・平岡・平賀・平戸・平尾

山崎 諭氏著の「郷土の地名考」によると、多良山麓の小長井地方にはヒラのついた地名がもっとも多く、又屋根の傾斜も前平（マエビラ）後平（ウシロビラ）というと書いてある。多良火山は全国でも有名な美しいスロープの火山である。タラの語源も「平らな広大な傾斜地」という意味である。多良火山麓の小長井に平の地名の多いのはこのような関係であろう。諫早平野に立つと南北に雲仙火山と多良火山の雄大な裾野が、美しいスロープをえがいて相対している。愛野町はこの美しい裾野の上に位置しているのである。

その他^{ヒラ}平は「坂」「崖」にも使用する場合がある。

第1図 島原半島の高野（小字）地名の分布

中世地名で島原半島の北目に多い。高野の名の如く雲仙火山の美しい裾野と調和した地名である。



高野

前記の原地名とともに歴史的・地理的に意義深い地名で愛野町には次の地名があり、いずれも各河谷の奥の扇状地上に位置している。

野井

植木高野 新高野 木場高野 大高野

愛津

小無田高野 寺尾高野 浜口高野 新高野 原高野 椿高野（新高野は愛津・野井両方ともにある）

第1図の如く島原半島の北目（島原・有明・国見・瑞穂・吾妻・愛野に多い点よりみると、雲仙火山の裾野（扇状地）と調和した地名と思って間違いない。字の如く高野は高い野原で、島原半島の北目が最も美しい裾野をもっている。島原半島の西目の小刻みの起伏に富んだ小浜・南串山には高野の地名は完全にない。

高野の地名の起源は開拓・開墾と同じで治・^{ハツ}壘・^{ハツ}針・^{ハツ}原と同じである。荒野・興屋・興屋と書く場合もある。親村（元村）の次男などが荒野・高原などを開拓して子村をつくり分村したのであろう。小無田高野・寺尾高野・浜口高野・木場高野は、それぞれ小無田・寺尾・浜口・木場の人によって開拓されたのであろう。

高野地名発生時代の参考となるものに、次の記録がある。地理学二巻7号P20

「庄内平野には興屋（高野）と名のつく地名が多い。多くは慶長・元和ころからの記録が保存されているのをみると、おそらく戦国の終りごろ、免許をうけて5年間ぐらい荒野の取扱いをうけたものらしい。七年荒野・十年荒野などがある。赤川の三角州の先端すなわち大山川に沿う川岸に荒興屋・野興屋・興屋などの部落がならんでいるが、それと平行して2mほど高い土地に京田と呼ばれる地名がならんでいる。京田は戦国以前の開墾なることはたしからしい」

これを参考にすると愛野の裾野の開拓は慶長・元和以前の戦国の終頃ということになろう。又野井の光西寺裏の京手（京田）の歴史は戦国以前の中世になるだろう。

尾

愛野扇状地には多くの小さな河川が平行して流れているが、これらの河川は扇状地を浸食して谷を形成している。この谷と谷との間は扇状地の原面が平たく残り台地状を呈すると共に長い尾根となって有明海に斜面をむけている。この尾根に西より牧ノ尾・城の尾・寺ノ尾・尻無尾・境ノ尾・向ノ尾・中尾・重尾等の地名をつけている。東京の場合はこのような地形に尾をつけず駿河台・上野台・本郷台とつけている。

牧ノ尾——尾の上の平たい土地を放牧・狩猟に利用したのであろう。

尻無尾——この地形は狩猟（鹿・猪）によい地形である。（後述）

城ノ尾——愛津城の背後の尾根である。

寺ノ尾——釈迦堂という寺があったからであろう。

境ノ尾——この尾根を愛津と野井の境界にしている。

向ノ尾——今木場・八幡神社の尾根より見れば向う側の尾根である。地方によっては迎^{ムカヒ}とつける場合もある。

中尾——尾根の先端が三つに分岐し、明らかに中間の尾根である。

重尾——愛野の奥地で原始農業の焼畑をしていた尾根であろう。対馬では焼畑農業をシゲと呼び、そのような土地を木場・木庭という。

迫・久保・谷

裾野を河川が浸食して、くぼんだ所を「久保」「谷」と称し、東京の場合は渋谷・世田ヶ谷・市が谷・四谷が有名である。愛野の場合も六左^エ谷（木場川）・姨ヶ谷（相原川）・割石谷（小無田川）・谷・野井山谷（今木場川）がある。迫はせまく細く行きづまったような谷で佐古とかく場合もある。野井の迫が典型的であろう。その先に久保があるが、わずかながら、くぼんでいるのだろうか。東京には荻窪・芝西久保がある。愛津の迫・上迫も河川の浸食によって出来た典型的な迫である。

頭

1つの川・入江・浦・谷（田）に於て上流に位置するところを川頭・江頭・浦頭・田頭と頭をつける場合がある。又上をつけて川上・浦上・江上・田上とつける場合もある。愛野に於ては次の川の上流又は奥地である。

谷 頭——中島方面の川の上流

善太頭——相原川の上流

割石頭——小無田川の上流

野井山頭——今木場川の上流

葉山頭——葉山の谷の上の方に位置する。

尻・口

1つの川・入江・浦・谷（田）の下流の方を尻をつけて、川尻・江尻・浦戸・田尻とつける。又口をつけて川口・江口・田口とつける。愛野において尻のつく地名には次の地名がある。いずれも下流に間違いない。

割石尻・入龍尻・千鳥川尻・井川尻・野井山尻・山ノ田尻・尻無尾・垣尻（関所の柵の尻になる地点）

又口のつく地名には次の地名がある。全部入口である。山ノ口・瀬ノ口・土井口・浜口・小牟田口

竹火・竹崎

美しい千々石断層に竹火^{タケ}・上竹火があり、その延長線上の千々石町に西嶽火^{タケ}・東嶽火がある。タケは高い崖を意味し、高^{タカ}がタケになまったものだという。従って竹（植物）には関係がないという。故に竹火とは千々石断層を形容した古語である。然し竹火の火（ヒ）は何からきたかわからない。

西南日本には竹田・竹内・竹辺の地名が多く武田・武内・武辺と書く場合もある。崖の上の小高い所にあるという意味で、日射・遠見・外敵防御にめぐまれ、水害の心配がない。人間生活に最もよい地理的条件で、豪族屋敷等に多く歴史が古い。

愛野の竹崎の崎は「前」「先」を意味し、前面に崖を有する小高い土地という意味でないだろうか。南部に近接して五郎丸・園田・原等の中世の歴史を物語る地名が多い。愛野対岸の佐賀県竹崎・佐世保市竹辺・大村の武部等中世の歴史ゆかしいところである。

柳田国男の「地名の研究」によると竹の地名は植物の竹と全然関係がないというわけにもいけないという。「竹の花」「竹の鼻」等の豪族屋敷は竹藪で屋敷をかくし、遠目をさえぎった所が多いという。故に竹の鼻とは竹におおわれた尾根の先端（鼻）で、前に川や沼地があったならば武備に最もよい地形である。愛野の矢櫃などと関係のある地名でないだろうか。竹崎に近接して五郎丸がある。北松浦郡福島町には竹ノ上・竹山・竹山前・成竹地名に近接して弓矢をつかさどる矢別当の地名がある。

立山

立山・館山^{タテ}・楯山^{タテ}等、皆同じで立山は館山^{タテ}が変化したのであろう。西日本の城山に対し東日本は館山とよぶ。館山とは大きな邸のある山で城山のことである。長崎市の立山（館山）は長崎奉行の大きな邸のあった山のことである。

愛野の立山は、はたして館山・城山であっただろうか、城ノ尾・丸の内・城の前・構などの地名と比較して考える必要がある。立石・楯の語源は石を立てて、又は楯として矢をふせぐ意であるという。西彼杵郡大瀬戸町の小峰城は中世の古城であるが、西彼特有の結晶片岩を立てて、矢戦の楯としてゐる。

丸山

丸は城に使用する場合と、船に使用する場合がある。又ほぼ円く一廊をなした丸味をもった地形の山を丸山という場合がある。平戸の川内浦には丸山があり丸味をおびた山である。遠洋航海に疲れた南蛮船にとっては、またとない酒食の地丸山遊廓であった。寛永18年オランダ商館が長崎に移転するにつれて、丸山遊廓も長崎に地名と共に移転した。愛野の丸山も地形的にみて台地が今木場川の谷につき出て、やや丸山の形をしているようである。

栗山

栗・緑のクリは石ころをいう場合が多い。東京方面では道路に敷く割石をワリグリという場合がある。故に石ころの多い山という意味でないだろうか。愛野の割石と関係があるのではないだろうか。

小山

地形的にみて周囲を水田に囲まれ、小さい山が突出し、頂上に家が2、3軒ある。重尾の南部にある。

首塚

地峡とは海にはさまれたせまい土地で、このせまい土地で、かつての島を本陸につないだ場合が多い。故にこのような所は首の部分にあるから郷ノ首等の地名をつける場合が多い。

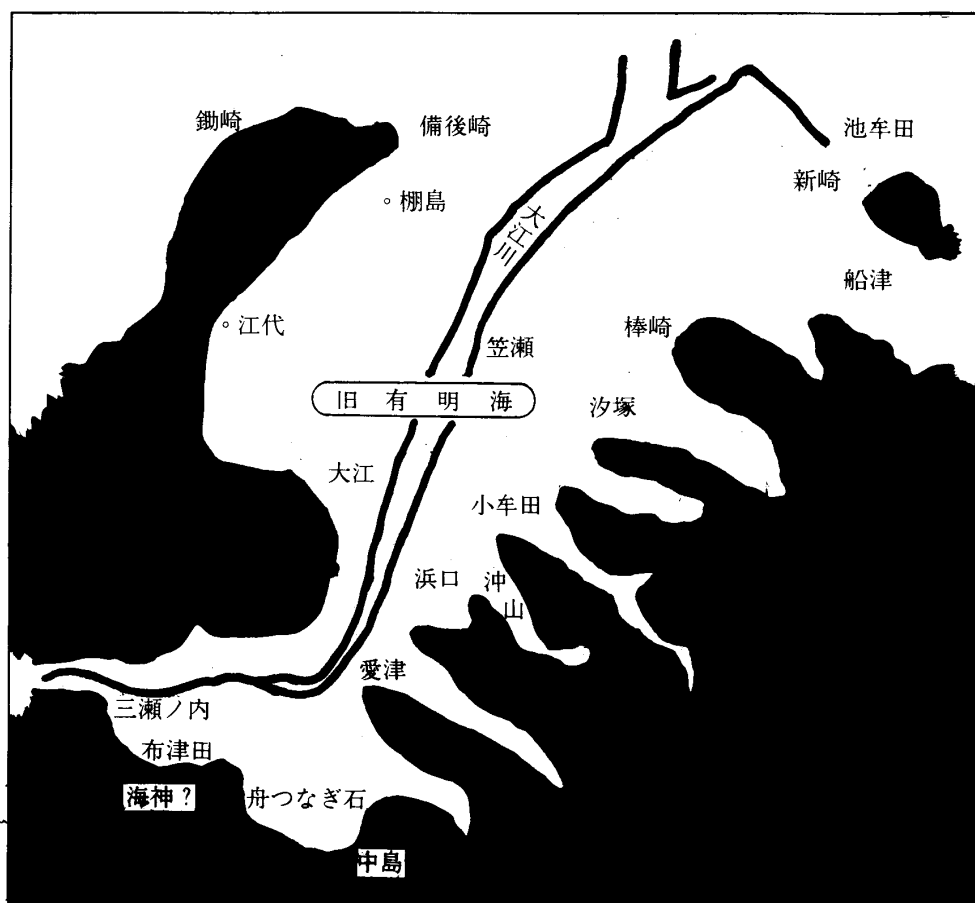
愛野の蓮沼や大江川流域が古代に於て、青い海原であった場合、首塚付近は、わずか幅1 km程の地峡であったことは地形・地質上大略想像がつく。故に愛野は島原半島の首（地峡）の位置にあたる。故に首塚は島原半島の首（地峡）に位置する古墳文化前期の古墳であるから首塚とつけたのであろう。島原半島で塚のつく地名の大半は古墳である。左に書いてみよう。

「大塚・長塚・犬塚・塚原・塚田・白塚・鬼塚・遠目塚・人塚」

然し愛野の首塚だけを以て、このような判断を下すことは危険である。他地方の例もあげてみよう。

1. 北松浦郡福島町に「くびれ新田」という所がある。ここはわずかの地峡で塩浜半島とつながっている。かつて海峡だった時代もある。この首の部分を干拓して「くびれ新田」というのである。くびれは縛れとかくが、首をくくるというような意味であらう。
2. 五島列島に郷の首というところがある。昔の島を砂州でつないだ陸撃島で、昔の島が頭で、郷ノ首は首の位置にある。
3. 首は半島状の地形をいう場合もある。佐賀県鎮西町に首塚があり、この地形は半島状をなしている。又「くびれ」等の地名もある。この首塚のあるところは串地区であるが、串は朝鮮語で半島ということであり、串地区は立派な細長い半島である。この半島の根本がせまく、くびれたところもある。
4. 首は入口をさしている場合もある。長崎近郊に土井の首というところがある。干拓堤防の入口という意味だろうか。愛津の土井の口の関所も干拓堤防の入口だから土井ノ首といってもよいわけである。
5. 鎮西町の首塚は豊臣秀吉が朝鮮征伐の捕虜の首を数万人埋めた塚だという説があるが、地理的にくびれた地形の土地にある塚なのが研究してみる必要がある。

第2図 愛野の旧有明海を証明する地名



1. 津は港，崎は岬の先端，牟田は干潟
2. 大江は大きな入江

2. 旧海岸線と地名

愛野町は干拓が進み海岸線は前進している。故に陸地の内部に旧海岸線を想像させる数多の地名が残っている。有明町前面の国道に沿う棚島などは、かつて大島・中島・沖島のように波静かな有明海にうかんでいたのであるが、地名だけは昔のままに残っており感慨ぶかいものがある。これが、かつて島原藩と佐賀藩の所属をめぐる、海面論争が行われたのである。

左に愛野町陸地内部の旧海岸線地名をあげてみよう。

大江川・舟つなぎ石・中島・浜口・棒崎・新崎・小牟田・池無田・汐塚・龍宮・三瀬ノ内・布津田・蓮沼等がある。

大江川

現在は有明川というが、大江川の名のように、大きな入江で三軒茶屋付近まで奥深く入込んでいた波青い浦であったわけである。現在は殆んどこの入江は干拓されて昔の面影はとどめない。最後に残った大江川さえも堆積が進んで溝のような状態にならんとしつつある。この大江川は有明川と改名されているが、やはり祖先の残してくれた大江川の方が、過去の歴史・地理を残して意義ぶかいものがある。有明川では昔の面影はわからない。

入江や浦の奥の方には江頭・江上・浦頭・浦上等の地名をつけるものである。浦上は長崎に、江上

は佐世保にある。三軒茶屋付近に密頭という地名が残っている。これは江頭・浦頭のように水（密）頭であったのではないだろうか。然し地名だけで過去の姿を限定するだけでなく、科学的実証も必要である。土井口の関新田付近をボーリングすると貝殻や海底の土砂が大量に出るといふ。山麓に波打際のあとがあったり、貝塚があったら旧海岸線は決定的である。なお土井口のボーリングは寺本商店の人がしている。

棒崎・新崎

8つあまりある愛野の小河谷も、昔は沈水して小さな入江となり、尾根は有明海に突き出て、小さな半島や岬の時代があった。棒崎が典型的で、その上を見張らしのよい所に十拳剣神社や印の松がある。新崎も棒崎と同じで崎の先端の要害の地を野井城に利用したわけである。諫早から愛野までバスで来る時備後崎・釜ノ鼻・黒崎・赤崎・鷺崎等の地名や停留所があるが、これも棒崎のように、かつて有明海上に突き出ていた半島である。

小牟田

牟田は無田とも書き西北九州に密集する地名である。牟田の語源は湿地・泥田で、有明海では干潟を意味し、大牟田が有名である。大牟田の意味は広い遠浅の浅瀬を意味するのであろう。その他井牟田・菅牟田等の地名がある。牟田に似たものに仁田（ニタ）似田（ニタ）奴田（ヌタ）があり、仁田は近畿地方中心に分布している。愛野には小牟田の他に池無田がある。

中島

関新田は昔は海で、水田の下から濁土や貝殻が出る。この海に流れ込んでいた川が中島川である。河川は下流に三角形の三角州をつくる。両方を川にかこまれた川中島となる。中島は中島川の下流にあるこのような三角州に位置した平たい砂の島であったのであろう。中島川によって流された砂で構成されているから、掘れば砂ばかりで岩盤はない。大阪の中ノ島や、千曲川の川中島はこのようなところである。

浜口

入竜川の河谷から浜に出る場合のその出口という意味であらう。

新地・新田

江戸時代の干拓地をいう、古新田・後新田・古新田・新新田・関新田等がある。（干拓の項参考）

土井口

関新田干拓の堤防の入口という意味である。愛津城の土居の説もあるが、井樋の元という別名のあるところより見れば干拓の堤防の入口が正しいだろう。井樋は干拓の堤防である。

愛津

対岸の唐津・三軒茶屋港と共に、かつての渡し場又は対向集落である。津は港であることに間違いない。愛のアイは先述のように湧水・会見・相対する等の意味がある。現在は殆んど港の姿はなく、疑問をいだく程であるが、宝永年間の島原御領村々大概様子書に左のように書いてある。

船一 廻船一 三反帆 米積出し 島原城下湊まで

船津

千鳥川河口のよい港であったが、干拓（新田）の進行により、愛津のように内陸に封じ込められてしまった。然し少し注意すると過去の港の姿がみとめられる。然し明らかに有明海の港であった記録は島原御領村と大概様子書の左の記録でわかる。

船三 廻船二 八反帆 御蔵二軒 船津名にあり

龍宮下・龍宮上

古新田を干拓する時、海神（龍王）の怒をやわらげ、御心を慰める為に堤防上に龍神を祭ったのであろう。龍宮下は堤防の内側、龍宮上は堤防の外側の海の方であらう。北松浦郡方面では龍神の心をなぐさめる為に人柱の伝説のあるところがあり、松浦市の地図には人柱の地名もものっている。

蓮沼

古代に於て海であったことは肥前風土記や唐比の水晶観音由来記でもわかる。入口を石堤によって外海から遮断されてできた海跡湖（ラグーン）である。このようなところは排水が悪く沼のような状態となり蓮の生育によい。

布津田

三軒茶屋は近に布津田がある。布津のフツは経津主神（フツヌシーカミ）で海神の霊のことである。昔はこの神をおそれうやまつた。ヤマトタケルノミコトが東京湾を横切るとき富津洲で荒波にあい、オトタチバナヒメは海神フツのイケニエとなって海に浮んだ。布津田はこのような海の名残をとどめる地名でないだろうか。付近の山王神社、佐用の元とも関係のある地名でないだろうか。

東京湾口の富津洲は古津が訛って富津になったと、吉田東伍地名辞書にかいてある。故に愛野の布津田もこの付近に古津があったのではないだろうか。その南の三瀬ノ内も旧海岸に関係ありそうな地名である。

汐塚

町役場付近にある汐塚は海岸近くの前塚という意味だろうか。

結論としてこれらの旧海岸線地名は、大略旧島原街道に沿っている。故に島原街道は一種の浜街道であったわけである。

3. 水と地名

人間生活にとって水程大切なものはない。故に集落や地名の発生には水との関係は密接なものがある。各市町村に水と関係ある地名がないということは考えられない。井・泉・沢・池・川等の地名や人名は特に多い。先述のように愛津・野井がその典型的なものである。

愛津——アイとは湧水のことで水のわく港ということである。

野井

雲仙火山の裾野（扇状地）の先端から水がわくということである。

上清水川

清水は全国的に最も多い地名で大半湧水である。各市町村にも清水の小字は多い。京都の清水は勿論のこと、佐世保の清水中学、島原・小浜・有明にも清水がある。北松浦郡福島町には清水川・清水山・清水山と3つの小字のあるところもある。愛津の場合上清水川で下のないところをみると下は山王神社階段下の清水でないだろうか。

入龍・土龍坂

龍神・八大龍王・龍王神社・龍宮・龍面庵等これらの龍のつく地名の大半は水に関係がある。入龍川・入龍尻も水に関係ある地名であらう。土龍坂・土流坂共に地下水のため地すべりを起しやすい地名であらう。

井川尻

井のつく地名人名は井上・大井・今井・井ノ頭・坂井・井口・野井・土井等甚だ多い。野井の井川尻は湧水が井川となって流れ、その下流の方ということであらう。

沢

湿地で水の多い所をいう。又沼沢地・小川・谷をさす場合もある。沢のつく地名には沢田・沢村・沢井・水沢等がある。愛津の谷沢も雲仙火山の裾野の水の多い谷であろう。

4. 農業と地名

木場

農業の起源の焼畑農業からきた地名である。農業の起源は焼畑で山を焼き灰分を肥料とする火田である。故に畑の字は火扁と田である。山林を焼き肥料（灰分）がつきれば、他の地方に移動して再び山林を焼くという移動農業である。

この移動農業の風習は特に朝鮮に多く、特に北鮮の蓋馬（ケーマ）高原に多かった。朝鮮に近い長崎県には過去に於てこの風習が多くこのような所を木場・古場・小場とよび、朝鮮に近い対馬では木庭とよんでいる。木場の分布は比較的人里離れた山地に多く隠田集落（落人）・地すべり地帯・陶業との関係が深い。地形的にみて地理的条件の悪い山地にある場合が多い。

その他木場をサシ・サスとよぶ場合が多い。佐世保の指方・対馬の佐須奈・唐津付近の佐志がよい例である。野井の千鳥川上流の差出・差出平も焼畑からきたのであろう木場と隣接している。

朝鮮に近い長崎県には特に多く、佐世保付近の山地には特に多い。島原半島も中木場・大野木場・上木場等各地に木場が多く、千々石の木場は大字である。吾妻町に焼森という小字があるが、焼畑に類するものであり木場と同じであろう。

愛野も木場高野・木場平今木場が野井にあり、木場が愛津にある。いずれも地理的にみて比較的山地にある。今木場が山地にないのは研究してみる必要がある。

化粧手（化粧田）

野井光西寺裏の京田を京手と書いてあるから、化粧手も化粧田がなまったものであろう。同じく順手も順田だろう。

化粧田はけわいでんとも読み、中世及び江戸初期に、領主・地頭・大名などでの婚姻のさい、嫁する娘にもたせた田地のこと、また、江戸時代の農民が嫁入りさせる場合に持参させる田畑も化粧田といった。野井の化粧田は付近の野井城関係の姫のものか、又は付近の農民の娘のものであろうか。

第3図 歴史の古い光西寺裏の大坪、京手（京田）付近



千鳥川下流の平野

その他ケシヨウはカシオ（山稜の斜面）が転化したもので鎌倉の化粧坂・化粧殿の鼻・白粉（ケシヨーパーハ）等がある。然し地形的に愛野の化粧田をみた場合、前説が正しいだろう。

京手（京田）

野井の光西寺裏手の水田を京手という。おそらく京田が長い歴史の間に訛ったものであろう。京田は給田等と共に中世の歴史を物語る地名荘園集落である。北部にある大坪・園田・鬼塚・五郎丸と共に愛野の歴史を語る重要な地名に間違いはない。又光西寺周辺を散歩することにより、自ら歴史の古さが感ぜられる。（第3図）

愛野最大の河川である千鳥川の下流に位置し、古代・中世に於て最初に人が居住すべき地理的条件をもっている。京田という地名は島原半島に於て愛野以外に国見町多比良と有明町湯江にみられる。

京田の字源は読経の費用を出す経田が京田に変わったものであると言う。

順手（順田）

京田と同じく順手は順田がなまったもので歴史の古い地名に間違いはないだろう。干拓は陸地に近い順田（古代・中世）から海の方に古新田・沖新田（近世）・有明新田（現代）と進んでいったのであろう。

八反畑・五反間

八反や五反の面積の田をいう。東京の国鉄山手線に五反田駅がある。五反田は全国各地に分布する。その他三反田・六反田・八反田・九反田などが各地にあり、いずれも開墾した耕地の分配からきている。その他一丁田などの停留所もある。珍しい地名には一坪田・一畝田・百万刈等の地名もあり、北松浦郡小佐々町には一升五合という小字があり一升五合の収穫があるのであろう。対馬には一斗蒔^{マキ}という地名もある。

新田

開墾地を意味する。新田とは江戸時代の開拓地で、先史時代の田^タ所^{ドコロ}、古代の田代^{タシロ}、中世の高野、江戸時代の新田、現代の農場に相對する言葉である。新田もまた江戸時代前期のものを古新田^{フル}とよぶ場合が多い。

江戸時代の開拓は、火山の裾野・扇状地・台地の場合もあったが、海岸の干拓の場合も多かった。然し新田地名は江戸時代の干拓の方が多いようである。陸地の開発で有名なのは武蔵野の新田集落である。

新田と同じ意味の語に、新開・開・新村・開作・新居・新地・出屋敷・荒居・荒屋敷・新屋敷・出村・今在家がある。いずれも新しい土地を開拓したような地名である。愛野町として注意しなくてはならないのは新開・開・新地・新居である。新居（アライ）（ニイ）は野井（ノイ）の転化した言葉であるといわれている。今在家の今は新で古に対する言葉であり、在家は部落である。故に開拓・干拓して今新しく出来た部落のことである。これに似た言葉には今村・今里・今里（伊万里）などがある。これに対する言葉は古里であらう。

有明川（大江川）をへだてて、森山（佐賀藩）側には、五左衛門籠・甚兵衛籠・備後開・柵籠等の籠^{カサミ}のつく地名が多い。又佐賀県側には八谷搦^{ガタミ}・別段搦^{カサミ}等搦^{カサミ}のつく干拓地名が多い。籠・搦は佐賀藩特有の全国的に有名な干拓地名である。愛野にこの地名がないのは、愛野が島原藩であるからである。

愛野の新田地名で、注意しなくてはならないのは干拓の新旧や、陸に近いか海に近いかによって、新田地名が異なることである。愛津の古新田と後新田では、古新田が陸地側で歴史が古く、後新田はその先の海の方につき足したという意味で歴史が新しい。古新田は1770年（明和7年）に完成しているが、後新田は1779年（安永8年）の9年後に完成している。野井の古新田と新^{アキラシ}新田では字の通りで、

古新田は1800年（寛政12年）で文政以前であり、新新田は（1841）天保12年の完成で新しく海の方に
つぎ足した新田である。沖新田は字の通り沖の方に又つぎ足した新田で（1858）の安政5年の完成で
ある。地方によっては中間の堤防（土肥）基準にして土肥の内・土肥の外、内新田・外新田という場
合もある。

野井の龍宮下

龍宮上という地名は干拓の堤防に海神（龍神）を祭り、その堤防の内側・陸地側を龍宮上、外側海
の方を龍宮下といっているのであろう。

開拓者地名（人名）

開拓者の地名又は豪族の地名をつけたと思われるものに善太下・善太頭・六左^エ谷・田善（田中善
兵衛）・太郎丸・八郎下・八郎松・八郎脇の地名があり、おそらくその土地の有力者又は有名人に間
違いない。その他佐世保、森山の忠兵衛・弥平谷・九平次籠等全国の市町村に必らずある地名である。

その他島原半島の各市町村にも必ずあり、島原市の平松下・三平池・千々石の弥太郎・吾妻町の喜
四郎町がある。

愛野の人名地名の地理的分布で研究を要するのは、人名地名が愛野の河谷の奥地に略東西に分布す
ることである。

- 。六左^エ谷——木場川（愛野）の上流
- 。善太・善太頭・善太下——相原川の上流
- 。八郎下・八郎松——小無田川の上流
- 。八郎脇——境尾川の上流

おそらく上流、又山地の奥にむかって開拓した人の地名であろう。

5. 狩猟と地名

太古や古代に農耕生活のない時代に狩猟生活は人間にとって大切な生活であった。縄文時代は狩猟、
採集生活で古く、弥生時代の農耕生活はそれより新しい生活であった。中世や近世に於ても猪・鹿・
兎などは人間の蛋白質の供給源として大切なものであった。猪と鹿は重要な蛋白源として、場合によ
ってはどちらもシシと呼ぶ場合があった。佐世保の北には鹿町、猪調町という町もある。

このように猪・鹿は重要なものであったが、反対に農耕生活の大敵として狩猟をする必要があった。
西彼杵半島や対馬に於ては猪垣^{シシガキ}が蜿蜒としてつらなり、如何に過去の猪害の恐しかったかを物語っ
ている。

武家による猪・鹿・鷹などの狩も盛に行われ、武芸練磨に必要な行事であった。猪の潜んでいる区
域や狩場のことを狩倉・一ノ倉・二倉といい、歴史上有名なのは鎌倉時代の富士の巻狩が最も有名で
ある。各地に鹿追の谷・責^{セメ}の谷等の地名が残っている。

愛野町には狩場・牧尾・山口・原口・尻無尾等の地名があるが吾妻・千々石・島原・福島・波佐見
には次のような狩猟地名が残っている。

- 。吾妻——獅子^{シシ}（猪）田平・尾尻
- 。千々石——牧内^マ・馬込^{ハス}・矢迦
- 。島原——猪圀^{シシガキ}・鷹場・山の神・神山・尻無
- 。福島——シシ^{シシ}（猪）地獄・猪の谷・鹿追久保・責^{セメ}の谷
- 。波佐見——猪見岳・鹿山神社・猪牧・狩立・狩余し

狩場

町役場の北部、今木場川の流域にあり、狩立・狩倉・狩余しなどと同じ意味のものであろう。

牧尾・牧尾平

本場川の相原川の中間の台地で、理想的な牧場又は狩猟地帯だったに相異ない。牧岳・内牧・小牧・牧島等牧のつく地名は必ず牧場である。三軒茶屋の駒市と関係があるだろう。

尻無尾

昔の狩猟と関係のある地形で、吾妻の尻尻・島原の尻無もこれと同じようなものであろう。佐世保付近も黒島・柚木に尻無尾がある。尻無尾とは山の尾根が下りてきて低地まで達せず途中で切れている所で、この尾の下が猪の通路にあたる所をいう。愛津の尻無尾も相原川河谷中に一つの小さな尾根が尻尾のように分かれている。北の方より動物などを追いつめたらよさそうな地形をしている。

山口

山口・野口・原口等の地名は一見平凡な地名や人名のようであるが狩猟や林業の立場より考えると民俗学上深い意味があり興味が深い。昔の人は山を神聖視し、山自体が御神体である場合が多かった。狩の為に山に入る場合は先ず山口・野口・原口で山ノ神に祈り、山ノ神の心を和らげ、1日のよい収穫を祈って入山した。又帰る時は山口に集まり、今日の収穫を神に感謝した。このような所を山口の外に狩集まりという場合もあり、山を山ノ神・神林という場合もあった。島原にも山ノ神・神山という所がある。各市町村にある山祇神社はこのような意味をもっている。波佐見には荘厳な鹿山神社があり、神社の周辺に狩立・猪狩の小字がある。

愛野の山口も今木場川上流の谷で、そこより野井山頭や野井山谷の山地にさしかかるところである。首塚付近の原にもこの付近より雲仙火山の裾野にさしかかる原口で、ここに集合して裾野の狩に出かけたのであろう。

対馬にはシゲと称する聖地（神山）が多く、しかも山岳信仰が強く、神社の神体が山そのものである場合が多かった。愛野の重（シゲ）尾のシゲはこのようなところよりきているのではないだろうか。

6. 交通と地名

三軒茶屋

島原藩の関門、又は島原街道の出発点で防衛・交通・交易と重要な所であったに相違ない。又過去の大江川（有明川）の物資輸送の最終点でもある。三軒茶屋の駒市などはこのような点よりながめる必要がある。

江戸時代は宿場町・一里塚の要素も多分にもっていただろう。一里塚等で休憩する点よりみて三軒茶屋の地名がよくこれを示している。又幸町（土居口）と共に本陣（大名宿泊）・旅籠^{ハタゴ}・問屋場（輸送通信）の機能があっただろう。当時の街道の松並木は古図にえがかれている。

幸町（土居口）は島原街道と西目街道の分かれ路にあたり一種の追分集落である。おそらく左島原方面、右千々石方面と旅人に対する標示石が立って指先が刻まれていたことだろう。今それはあとかたもないが……。

曲り坂

道路が七曲・十三曲・大曲と曲りくねるのは、道路が急な坂道であることが多い。こんな道を羊腸路といい、箱根の嶮や日光のイロハ坂が有名である。愛野町は千々石町と共に日本一の美しく急な坂道の千々石断層をもっている。現在の展望台より千々石に下りるバス道路がなかった昔はこの曲り坂を上下して通っていたのであろう。風雲急をつぐる島原の乱の時、千々石と愛野との間で騒動が起り

この坂を登り下りした記録が残っている。(島原半島史) 愛野の千鳥川の上流より千々石の島部落に下りる千々石断層崖の道は、羊の腸のように想像以上に曲っている。

その他千々石断層の坂道には、東海道の広重の浮世絵を思わせるような「伴七下路」「馬下路」等のロマンチックな小字がある。

辻

辻には二つの意味がある。鍵屋の辻などのように道路が十字に交叉するところをいう場合と、陣ノ辻・城ノ辻のように、山の峰が四方から集まって辻のようになっている山頂をいう場合がある。

愛野の中尾辻はおそらく道路の辻のことだろう。付近の葉山(ハヤマ)は山の端(ハシ)、いわゆる端山(ハヤマ)で、今より山にさしかかる大切な辻であったのではないだろうか。

佐用の元

佐用の元(サヨノモト)は塞^{サエ}ノ神、才^{サイ}の神の道祖神よりきた地名で、民俗学的な土俗学的信仰からきた地名である。道祖神は旅の案内・旅行安全を祈る神で道路の辻などや峠などに石像が立っている。

一方道祖神は藩境・村の入口などにあって境界の安全を守り、悪霊を塞^{サエ}ぎる神である。このような民俗は天孫ニニギノ命が大和島根に降臨の際、道路に鼻高の天狗猿田彦の命が立ち塞がっていた(塞の神)という古事記・日本書記の記からきたのであろう。猿田彦命は天孫降臨と聞いて道案内の為御出迎えしたことがわかった。

愛野の佐用の元は山王社の下の道路にあり、小さい祠がある。故に古い島原街道は土居口の堤防上でなくてこちらの方であったのではないだろうか。まさにここは島原街道に沿う島原藩の関門である。又猿葉山の猿と民俗学的に関係があるのではないだろうか。

道祖神で有名な地名は佐賀市に道祖元町があり江戸時代の大動脈長崎街道にそっている。島原半島では吾妻町に道祖神^{サヤノカミ}があり、瑞穂町に道祖尾^{サヤノヲ}がある。その他県北では国見山系のオサエ越にお才観音を祭ってある。ここは平戸藩と佐賀藩の関門であった。早岐付近には塔の崎のサヤン神があり平戸藩と大村藩の関門である。

道祖神は交通安全・藩境安泰の神でもあったが、又性愛の神であり生殖器崇拝の思想と結びついていて。サエノ神には男根や女型の石などを祭ってある。佐世保の穴妙見は巨大な洞そのものがサエの神である。又このような関係で塞^{サエ}の神が、「お才」「お佐代」「佐用御前」「佐用の元」と女性化した名前に変化している。松本市や満州には男女交合像もある。

この塞の神には素朴な村人が縁結び、子宝、出産安全、婦人下の病等で御参りしているようである。又県北国見山系のオサエ越には忠臣山本右京の妻の出産に対する悲壮な物語がひそんでいる。

道祖神が如何にして性愛に結びつくかは次のような説がある。古事記、日本書記にある天孫降臨の際、道に猿田彦命が道を塞いでいた。そこにアナノウズメノ命(女神)が使に行き契をはたして道案内の神であるということを確認したということである。

その他縄文時代の文化に、塞の神式土器文化があるということも知っておくべきである。愛野の佐用の元の祠は単なる塞の神の祠だろうか。考古学的なものだろうか。

7. 宗教と地名

愛野町には愛津に四面平・天神平・宮ノ前・山王・寺尾があり、野井に宮ノ本・宮添・宮崎がある。前項の佐用ノ元も宗教地名に入れてよいだろう。その他他村には一ノ宮・大日・堂の前・宮田等の地名がある。山岳信仰の立場より山には虚空蔵・弘法岳・大日岳等の山名があるが、島原半島にも普賢岳・妙見岳等の宗教山名がある。

宗教地名はその地方の文化を知るための重要な地位を占める。例えば次のような場合がある。

1. 寺や神社は長い歴史の間に消失していても、地名だけは厳然と残っている場合が多い。地名をたどって昔の文化を知ることが出来る。
2. 宗教地名によってその地の文化の時代がわかる。例えば大日地名は奈良時代である。
3. 仏崎に仏はなくとも、地名をたどって海底深く調査し、仏は海底に落下していたことがわかった場合もある。

寺尾

寺が昔あった尾根で昔釈迦堂があった。今の中学校のある尾根又は台地である。お宮のある尾根は宮尾だろう。

宮ノ前

四面神社の前ということで、寺だったら門前だろう。

四面平・天神平

四面神社や天満宮がのっている台地のことである。

宮ノ本

野井の八幡神社のある周辺の土地ということだろう。

宮添

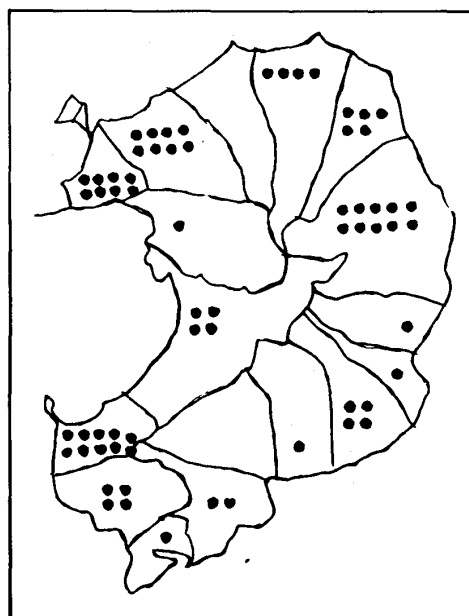
野井の龍宮に沿う土地ということだろう。川添は川にそう、野添は野に沿うと同じだろう。

宮崎

本来ならば岬（崎）の先端にお宮があるのが適当であるが、現地の地形よりして合致しない。むしろ棒崎の先端に位置する十拳剣神社の方が地形的には理想的な宮崎である。寺があったら寺崎になるはずである。佐世保にはかつての岬（崎）の先端に住吉神社があり、典型的な宮崎である。

第4図 島原半島の塚（小字）の分布

1. 塚のつく地名は古墳の場合が多い。（鬼塚、大塚、長塚、塚原、白塚、犬塚、京塚、人塚、笹塚、小塚、柏塚）
2. 愛野には鬼塚、白塚、汐塚等8つの小字がある。



8. 歴史的地名

歴史的地名は、愛野第一の河流の千鳥川流域に発達する。大坪・園田・五郎丸・鬼塚・京田・城山等の地名がその代表的地名である。千鳥川流域の比較的豊かな平野に恵まれたのが有利な地理的条件である。又島原半島でも歴史の古い隣村吾妻町に近接し、隣接地刺戟をうけたせいかわからない。

鬼塚

石室や石棺のある古墳をいう。又鬼の伝説のある塚をいう場合がある。愛野町にも鬼塚小字が2つある。鬼塚は県下各地にも多く特に壱岐の鬼塚は有名である。その他鬼のついた地名には鬼木・鬼突(築)等があり、島原半島には次のようなものがある。

鬼ノ家(島原)、下鬼木(鬼ヶ平)(瑞穂)、鬼穴(千々石)鬼山(千々石)、鬼石(小浜)、鬼石(深江)、鬼石(西有家)島原半島には、鬼塚の小字をもつものも多く、愛野のように2つある所もある。その他鬼塚地名は国見(1)、吾妻(3)、有家(4)、布津(1)の数字が出ている。

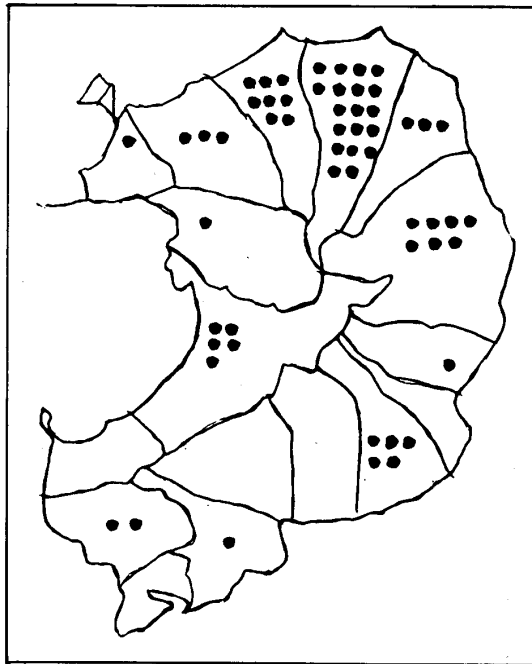
その他塚のつくものは古墳の場合が多く、島原(小塚・笹塚・人塚・大塚・長塚)、有明(明法塚・石塚・石塚山)、国見(塚原・横塚)、吾妻(菟塚・大塚)、千々石(柏塚)、小浜(塚畑・裏塚)、南串山(塚の山)、加津佐(塚原・上孫ノ塚・長塚・犬塚)、深江(京塚)、口之津(塚下)、南有馬(大塚)、北有馬(塩塚)、愛野(白塚・汐塚)などがある。(第4図)

白塚

展望台下の千々石断層崖の下にある。白(シラ)の語源はスラ・スリ・スル・スルスル・スベルところという意味の擬声的な語である。スルスルすべる斜面の意味である。これは今なおすべる千々石活断層と何かの関係がないだろうか。北部にある品垂^{シナグレ}の垂(グレ)も土地がスルスル垂れ下がる千々石断層と関係のある地名である。

第5図 島原半島の園(小字)の分布

1. 平安時代の荘園と関係ある地名で、園田・大園・花園・桃園・宮園等がある。愛野に園田がある。
2. 国見町を中心として、島原半島北目に多く中世の文化が、北目中心であることがわかる。



汐塚

西有家にも塩塚がある。汐・塩であるから海岸にある古墳であろう。両者の地理的条件や歴史を比較対象して研究すべきであろう。

園田

園は平安時代の庄園に関係ある地名で苑（ソノ）と書く場合もある。有家の大苑がよい例である。園の地名は島原半島北部（北目）の国見町を中心として多く、次のような園地名がある。（第5図）

- ・国見町（十園・園・宮園・外園・園宮園・園田・久保の園・越園・大園・高園・園田）
- ・有明町（園田・釜園・中園）
- ・瑞穂町（東園・園田平・寺園・園田・園田高野）
- ・吾妻町（小園・大園・北園）
- ・愛野町（園田）

これによって同時代の島原半島の文化地域が判定される。愛野の園田は台地上の最も地理的条件のよい位置にあるが周辺の宮ノ本（八幡神社）・原・五郎丸・鬼塚との関係も研究しなくてはならない。

ソノ・ゾノの字源は主作物以外のものを植えたところのことで屋敷内の蔬菜園と関係が深い。西南日本、とくに九州に多い地名である。桃・松・梅・桜・茶などの栽培種をとってそれぞれ桃園・松園・花園・梅園等の地名をつける。又大・中・小・上・下を冠してそれぞれ大園・中園等をつける。

坪（大坪・九反坪）

園が中世地名ならば坪は古代地名である。大化改新（645）に班田収授の制度が実施され、耕地整理が行なわれた。それによって条里が定められ、碁盤目状の正しい条里集落（条里村）がつくられた。これはわが国で最も早くつくられた計画的村落である。

耕地を碁盤目状に仕切るのであるから、起伏の甚だしい山地には無理で、河川の流域の水田耕作の可能な平野がよい。愛野最大の河である千鳥川下流の三角州上にある大坪は地理的条件にかなっている。

水田を東西と南北の方向に、それぞれ六町に地割され、この六町四方の土地を里（さと）とよんだ。一里（り）二里の長さでない。一ノ里（さと）二ノ里（さと）と数字で表現される場合もあったが、江津ヶ里・大戸ヶ里とつける場合もあった。（第6図）

里を東西に並列して一条・二条とよび、縦に並列したのを一ノ里・二ノ里とよんでいたから条里集落とよぶのである。一ノ里を縦横六町で36等分し、一町四方を坪とよんだ。坪は又12反に分割された。

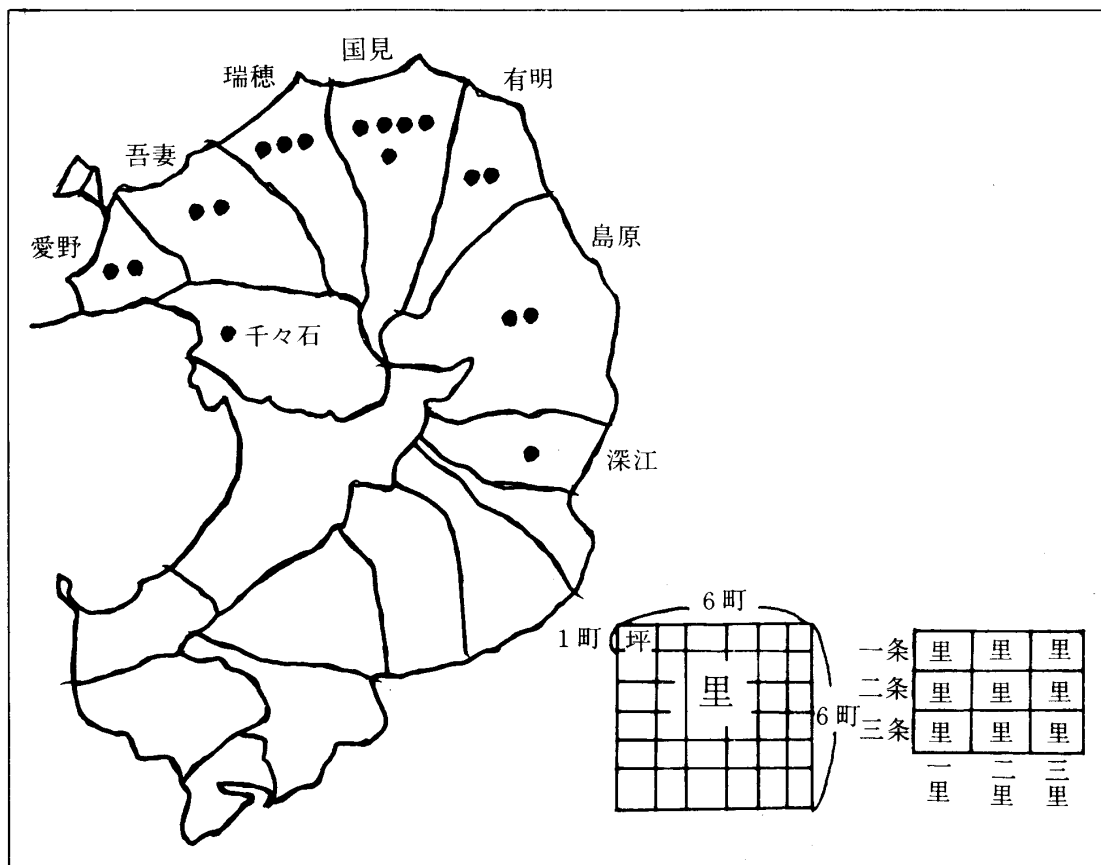
条里集落は奈良盆地を中心とする畿内に多く、日本の南北に次第に少なくなり、これは大和朝廷成立当時の勢力圏を示している。故に当時のこの制度成立の土地を調査するのは1435年後も未だに残存する次の地名によって調査することである。すなわち条・里・坪・反・一・二・三等の地名である。愛野町の千鳥川下流の三角州上にある大坪はまさしくこれにあたるに相違ない。又愛津桜山川下流の九反坪はまさしくこれにあたるだろう。愛野町で歴史の古い古代地名である。他町村には坪内・坪田等の地名もある。

全国的には古文書をあたり碁盤目正しい条里集落の複原につとめているところが多い。佐賀平野が最も美しく広大で、長崎県では土肥利男氏（諫早）の研究が有名である。（第7図）

島原半島では園の場合と同じように、国見町を中心とする北目に多く、南島原や西目の橋湾岸は千々石をのぞいて皆無である。やはり北より浸潤する日本文化の刺戟と代表的広大な雲仙火山の裾野の関係だろう。西目の起伏の甚だしい地形には縦横計画的な地割は適さない。

第6図 島原半島の坪（小字）の分布

1. 大化の改新の条里集落と関係はないだろうか。
2. 古代文化は北目であったことがわかる。
3. 田を基盤目状に区画し、坪、町、反、里、一、二、三等の地名が多いのが特長である。
4. 愛野には大坪、三反坪がある。



第7図 大化改新の条里集落の分布



- 国見町——六ノ坪・雁ノ坪・中ノ坪・大坪・口ノ坪
- 瑞穂町——京ノ坪・大坪・市ノ坪
- 吾妻町——大坪・口ノ坪
- 有明町——大坪・敷坪
- 島原市——坪ノ浦・大坪
- 愛野町——大坪・九反坪
- 深江町——中ノ坪
- 千々石町——大坪

その他坪（ツボ）は壺（ツボ）に通じ「淵・穴・くぼみ」に使用される場合もある。

五郎丸

中世の庄園集落（名田百姓村）の地名である。身分のある有力な開拓者（名主）と農奴に等しい小作人から成立している。開拓者の名前をつけて太郎丸・小犬丸・市丸とつけ、又は太郎名、貞光名とも言った。

愛野町の五郎丸、千々石町の六郎丸、犬丸、吾妻町の三つ丸がある。その他丸は土塁で囲まれたところを言う場合もある。南有馬の三ノ丸・二ノ丸・出丸・天草丸・鳩山出丸がそれである。波佐見の太郎丸も有名である。

土居口

ドイには土居・土井・土肥の三種類がある。いずれも土塁・堤防のことで、土肥は静岡・神奈川に多い。武士の屋敷は土塁・堀に囲まれており土居内・堀の内はこれより起った。愛津の土居口の場合に、土で囲まれた土居は愛津城の土居か、関新田の土居（堤防）の入口かということであるが、関所などの関係、又は島原街道の関門の関係で、島原街道の入口の土居口という見方が正しいだろう。

名（ミヨウ）

棒崎北部の台地上にある。中世の庄園集落（名田百姓村）からきている。名とは名田の略。名田とは「所有者の名で呼ばれる田」の意。それから、その名田のある土地の地名ともなった。新たに開墾したり、あるいはゆずりうけたり、買いとったり、奪いとった田にその所有者の名をつけて恒光名とか永平名とかよんだ。こういう名田をたくさん持っている大地主を江戸時代に大名といい、少ない地主を小名といった。この大名が後に江戸時代に封建諸侯（藩主）となった。

愛津の名は名だけであるのが面白い。人名のないところよりみると持主がわからないようになったのだろうか。前述のように太郎名、貞光名とつけるはずである。江戸時代になると名とよばず、開拓者の名前をつけて戸田殿新田とか、山県新田・五左エ門籠とつけた。明治になると小長井農場とつけるのと同じである。

構

愛野に東構・北構・萱構の小字がある。柳田国男の地名の研究によると、伊予の各郡に土居構53所があるという。松末氏の土居構は松末館といったという。おそらく館や堀ノ内などと共に豪族屋敷、又は畠などからきた地名でないだろうか。構の字源は身構え・陣地・企て等の意味から豪族屋敷との関係が深い。

免場

愛野の展望台付近に免場・免場下・東免場がある。免には次のように2つの意味がある。

1. 免とはユルス・ユルメル・ユルクスルという意味で江戸時代に田畑から取立てる租税を、或割合により減免を受ける田を免田、略して免といい、それが地名になった。荘園時代は自分の家の前にある免田を前田・正田・門田といったという。
2. 朝鮮語で村のことである。朝鮮に最も近い長崎県北部の松浦地方の大字は殆んど免で名切免・瀬戸越免とよぶ。朝鮮では道の下に面（メン）がある。朝鮮に近い壱岐ではメンをフレ（触）といい、壱岐の地図の全面触でおおわれている。東触・中触・元触等の字が多い。壱岐は触（フレ）、松浦郡は免（メン）、大村藩は郷、島原・諫早・長崎方面は名（ミョウ）であるのが面白い。おそらくこの説が正しいだろう。

丸ノ内

愛津城の近くにある。江戸城の丸ノ内と共に城と関係ある地名であろう。

垣尻

首塚の近くにあり、島原藩関所柵の終点である。

村外

島原藩関所の柵外にある集落である。中野、山川、沢の部落のことである。島原藩でありながら、関所の柵外である。これは地形、政策の関係である。

幽霊橋

村外の者が夜間に密に関所の柵をくぐる時、番人は大目にみて、「あれは幽霊であろうといって見逃したことよりきている」と口碑にある。

9. その他の地名

品垂（シナダレ）

地すべり地形だろう。垂（ダレ・タル・タレル）で土地が垂れ下がる。県北の有名な地すべりの樽川内の樽（タル）は垂れるからきている。その他地すべり地形には、抜け、コロビ石・崩山・雨久保・乙石（落石）・流矢（ナガレヤ）等が各地にある。

学術的にみて千々石断層の活断層を意味しているのであろう。千々石町の千々石断層にも品垂の小字があるから地すべり地形に間違いはないだろう。品の字源は階段で千々石断層が大きな階段に見えるのだろうか。

寝櫓

櫓はローソク用として江戸時代は重要な光熱資源で重要視された。島原半島の各市町には、櫓に関する次のような小字がある。一本櫓（島原）櫓山（有明）大櫓山（有明）二本櫓（深江）櫓山（口之津）櫓山（南有馬）櫓山谷（北有馬）櫓山（北有馬）蛸櫓木（西有家）馬櫓山（有家）平櫓谷（布津）櫓ノ本（口之津）櫓山（口之津）倒櫓（深江）行倒櫓（島原）

一本櫓・二本櫓・櫓ノ本などは交通の目標からきた地名でかり、蛸櫓木・倒櫓・行倒櫓などは櫓木の形態よりきた地名でないだろうか。愛野の寝櫓は橘湾方向からの海風で少し倒れて寝たような櫓があったのではないだろうか。深江の倒櫓に近い形態であったのであろう、棒崎のよんご松も有明海からの海風で少し横に寝ていたのではないだろうか。

鼻繰

鼻は突出の意味である。岬の突出した先端を鼻というように、牛の形をした霊石の鼻に当る部分の穴に、綱を通して強くひけば雨が降ると言う雨乞石で鼻繰の字の外に花栗、花繰と書く場合もある。その他島原半島では、有明（鼻繰）吾妻（鼻繰）の両町にあり、佐世保市にもある。

姨ヶ谷

山うばの伝説のある谷ということである。その他姨^{ワバ}のついた小字に姨田（瑞穂）乳母懷^{ウバ・ン・ツクラ}（小浜）乳母懷^{バ・ツクラ}（布津）がある。姨懷・姥^{ウバ・ン・ツクラ}ノ懷とも書き、祖母のふところに抱かれたような日当りのよい谷ということである。

難解地名

矢櫃—島原に矢櫃があり、北有馬に矢櫃口がある。矢を入れる櫃に似た地形があるのだろうか。県北には櫃岳という地名があり、櫃に似た地形の山ということになっている。その他島原半島で矢のついた小字には矢嶽・矢筈・矢代等があり、いずれも境界地名である。

虎継—難解

火箱—藩境にあり、狼煙場的なものでないだろうか。諫早には日（火）岳が藩境に存[・]り[・]の[・]ろ[・]し[・]台[・]である。

玉垣—昭和30年頃、団地が出来て、その団地の地名をつける時、玉垣という関取りの墓を移したことで、団地の名として玉垣という地名になった。

相の島—有名な日本地名学者鏡味完二の著書「日本の地名の中に次のようなことが書いてある。アイの項である。

アイとは村境のアイの神のことである。〔相の島（長崎県郡境で二分）・相原〕

長崎県郡境は南高来郡と北高来郡の郡境、すなわち愛野の山王社・三軒茶屋・火箱・中野・沢・首塚付近である。村境のアイの神とは水（湧水）の神でないだろうか。確かに山王社の階段下には古めかしい井戸があり水が湧いている。

村境の相（アイ）の神とは境界安全の神をいうのか。アイとは相対する境界安全の神だろうか。確かに山王社・佐用の元（塞神）等の境界安全の神がある。

相の島の島は村のことであり、又海陸のせまった地形をいう場合が多い。そうすると相ノ島は愛野村となり、地形的に愛野は地峡・海峡である。相原も愛野に二ヶ所ある。

二つある地名（愛野町内）

愛津と野井に次の地名がそれぞれ一つずつある。

迫・木場・宮ノ下・上ノ原・植松・新高野

迫は字の如く、くぼんだ土地（谷）であり、木場・植松は島原半島各市町村に多い地名である。

植物地名

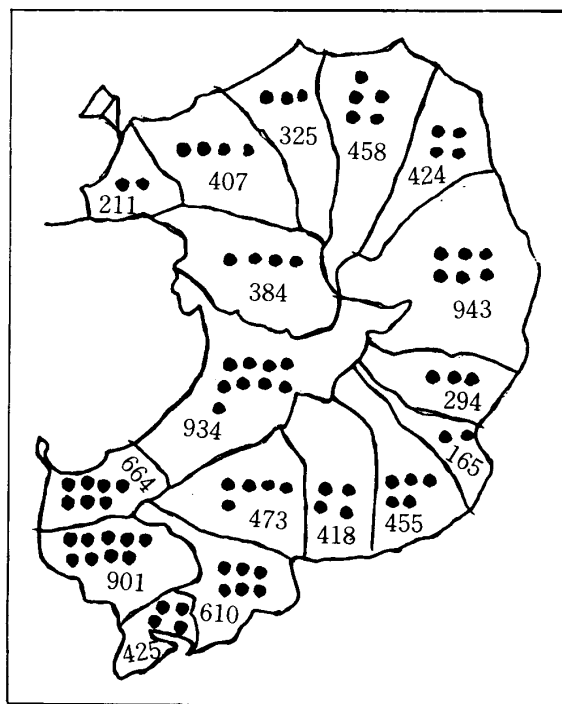
楠町・桐木・植松・椿高野・椿原・桜山・竹崎・松木原・桑木原・桃山等がある。そのうち椿・桑・桜等は島原半島各市町村に多い地名である。

10. 要約

1. 島原半島で最も小字地名の少ない町である。（第8図）最高は小浜の934、布津の165に対し、愛野は211である。これは愛野町自身が小さいこともあるが、平坦な火山の裾野の関係からであろう。大略同じ面積で地形の複雑な南串山は664も小字数がある。
2. 愛野町内に於て比較的歴史が古く、文化度の高い旧街道筋（旧海岸線）に近づくにつれて小字が密になり数が多い。これと反対に山間部に行くにつれ疎となり面積が広がる。
3. 古代地名の園・坪、中世地名の高野等は島原半島北部の裾野地帯に多いが、愛野は東方よりその影響をうけている。

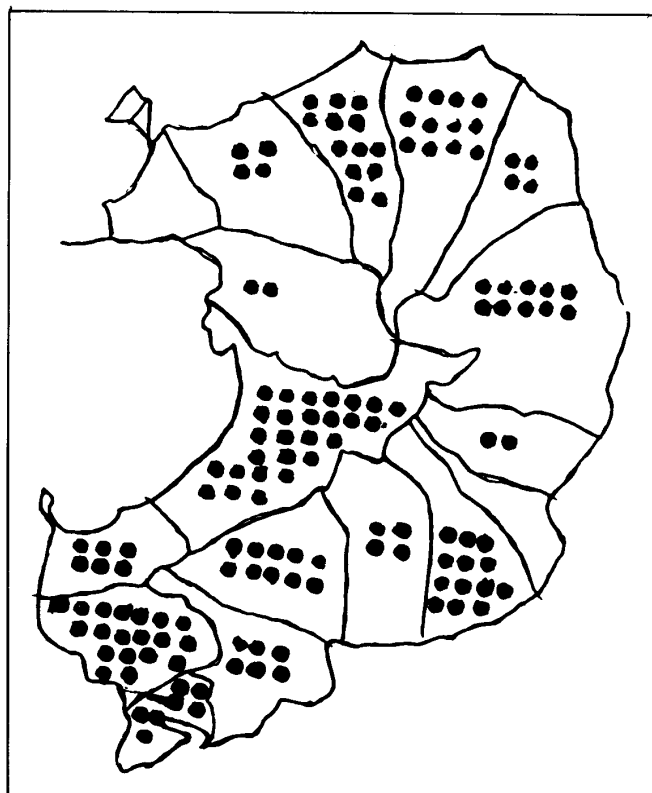
第8図 島原半島の小字数の分布（10位数四捨五入、一点100）

1. 愛野は深江と共に小字の少ない町である。
2. 町自身が小さいこと。平坦な地形の関係だろう。
3. 同じ面積の愛野（211）南串山（664）を比較してみると面白い。



第9図 島原半島の屋敷地名の分布

愛野町には完全がない。



特に吾妻町に近接する、千鳥川流域に多い。園田・大坪・五郎丸・京田（手）がそれである。特に五郎丸と京田（手）坪は、島原半島に於て注目する立場にある。

4. 他町村に比し次の地名が目立たないようである。

市場地名—市・二日市・古市等。

屋敷地名—中世の豪族屋敷であるか、愛野町には一つもない。他町には鍛冶屋敷・敵屋敷・上屋敷・源左屋敷等がある。（第9図）

気候地名—^{カゲ}蔭平・^{ヒナタ}日向平・^{ハエ}南風崎等の地名が他町にあるが、愛野町にはこれらの気候地名がない。

鉱物地名—赤石・黒石等であるが、愛野町には割石等の地名がある。

境界地名—矢岳・矢筈・境木等であるが、愛野町の火箱などは境界地名でないだろうか。

水産地名—網代・魚見ノ辻・鮑の浦（真珠）等であるが愛野町にはこれらの水産地名がない。